



パロスバーデスの南東側、我が家からのビュー

8 いかにか生きるか

8. 1 最後の楽園

私は大学卒業後2年程して建築と人生の武者修行の旅として渡米した。アメリカでの生活や経験が長いからいろいろな日本のことを忘れても、日本的な感覚を失ったということではなく、日本で子供の時に身につけた感覚を消すことは出来ない。私の建築設計の経験の大半はアメリカであるので、私はアメリカ的な大きなアイデアと日本の細かい詳細で設計をするとよく言われる。私はどちらつかずの国際人になってしまっているのかもしれない。多くの有名な世界の建築家から影響を受けたが、やはり初歩の段階でしっかりした建築の概念や哲学を学んだことが私の人生を大きく左右させるものとなった。偉大な建築の教育者、研究者そして建築家である恩師、船越徹先生から私は建築の哲学のみならず、人生の哲学を私は学んだ。私は「Second is nothing!」という生き方と、「常にベストをつくして生きよ」、そのスピリットを船越先生から学び、私の人生の基盤になった。

私も日本で言うところの還暦という年齢に近づいた頃、その年齢になって、改めてこれからの人生を如何に生き、何処に住むか、を考える様になった。

今、私の住んでいる所は、ロサンゼルスに位置し、太平洋に突き出した半島の一角にあるパロス・バーデスという所である。

それまで住んでいたハイランドパークの家は、自分の手でリフォームした家なのでたいへん愛着があった。その家から去りがたかったのだが、周囲の環境がどんどん悪くなり、犯罪が増えてきた。空き巣に入られたり、ある時、庭にピストルの弾が落ちていたりした。キシコ系アメリカ人のギャングが空に撃った弾が落ちてきたのだらうと思う。

引っ越すことにした。ロサンゼルスで一番安全といわれている、パロス・バーデス地域で売り家の物件を探しはじめた。私にとって、家からの眺望が第一である。庭の向こうに海が見える、そんな家を探した。私は大きな山より広々とした海の方のビューが好きだ。なおみは鎌倉の海の近くで育ったので彼女も海が見える家を望んでいた。限られた予算内では、そんな家はなかなか見つからなかった。私の予算では無理だ、と半ばあきらめ始めていたが、長いこと気長に探し続けてた。直感的に気に入ったビューのある家を見つけた。家だけでなく回り

船越先生とロサンゼルス建築を見学中
1990年頃



だいぶ前のことだが友人がこのガラスの教会で結婚式を挙げた





いろいろな雲と朝日の芸術作品が見られる

全体が気に入った。今の家を売れば、
なんとか買える値段であった。

この雰囲気、眺望、感じ、それに気
候といい、どこかで感じた覚えがあ
る。それはおそらく、かつて地中海
で味わったそれである。引っ越すこ
とを決意をしてから家を買うまで、

気長に2年半程、家を探し続け、パロス・バーデス南東地域で売りに出た80件近くの物
件を見たことになる。この家は、大変優秀な建築家が設計した家と思われる。家からの眺
望は、前面に180度開けていて素晴らしく眼下に、湾が見える。たくさんのヨットや大
型の豪華客船が出入りしている。よく晴れ渡った冬の日には、はるかかなたのサンディエ
ゴまで見ることが出来る。右手方向には、青い海が広がり、カタリナアイランドと太平洋
が見える。左手方向には、ロサンゼルス港、ロングビーチ湾とそのダウンタウンが見える。

はるかかなたには雪をかぶった山脈が見える。車で5分も行くと国際的レベルのドナル
ド・トランプのゴルフ場があり、そ
の中を歩いてパロス・バーデスの住
民だけが行けるプライベートのビー
チに行くことができる。その近くには、
ライトの設計した小さなガラス
の教会もある。我が家の前面、眺望
に面した部屋は、すべてガラス張り
になっていた。床のフローリングは、
その眺望方向に合わせて角度を変え
て張られてある。ファイヤープレ
ース（暖炉）はシンプルな現代的で、
しかも家の雰囲気にマッチした様に
造られていた。ファイヤープレ
ースに使われている石は、近くの採石場
から切り出された、パロス・バーデ



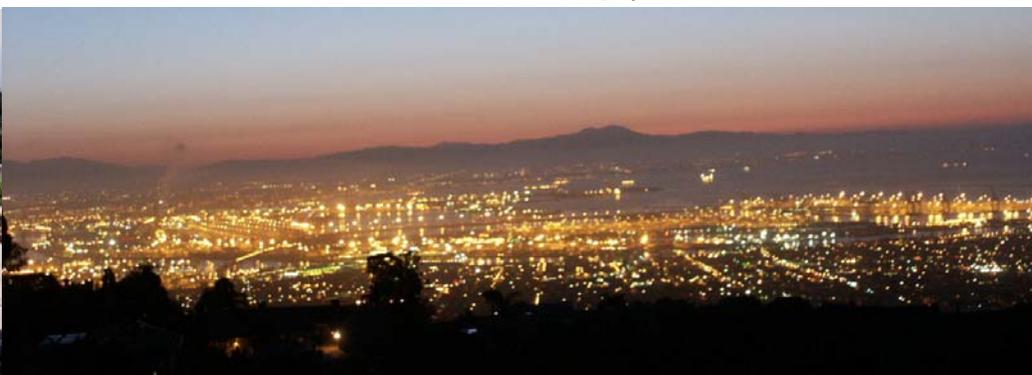
ダイニングルームから、パテオのジャクジや芝生
を越えて海のかなたから朝日が昇るのが見られる

日が昇るにつれて雲海も波がひくように雲がひきはじめ、近くの木々や家が見えてくる。こんな時、下界の複雑な出来事が忘れられる



最後の楽園？

ロサンゼルス港の夜景





春先になると門から家までのドライブウェイの両側は鮮やかな色の花が咲き乱れる。1年中、敷地のどこかに花が咲いている

ス・ストーンと呼ばれているが厚い石である。私が意図する様な設計する方法で、いろいろな所が作られていたので、今回は、家の改造はそれ程せずにランドスケープの改造に力を入れた。

ガラス張りの各部屋とパティオと芝生の庭が一体となり海への眺望につながるようにした。大きな敷地内には、色とりどりの花が、いつも咲きほこっているようにした。特に春から夏にかけては、門から家まで長く続く斜面の敷地全体がいろいろな花が咲き乱れ、カラフルに自然と交配したスイートピーの花は、毎年色が変わっていき、色が混ざり合って、15、16色以上の花の色となった。オーキッドの花以上に綺麗な色合いだ。いろいろな鳥が飛んでくる。いろいろな鳥に混じって孔雀が2羽、庭に舞いこんできたことが何度かあった。ここでは日本のように四季をあじわえないが、微妙な自然の変化の美しさをあじわうことができた。夏先になると、朝によく濃い霧に包まれる。隣の家も見えなくなり、近くの松の木だけがぼんやりと浮かび上がるように見える。まったく山の中に住んでいる気分である。しかし午後になると、その霧も晴れ、透き通るような青い空と青い海が見渡せるようになる。ある時は、下界がすべて雲海で覆われ、花の庭で囲まれたこの家は雲の上にあるようになった。また、家の中から見る事が出来る一面に広がる朝焼けと夕焼けはすばらしい。特に、秋から冬にかけて海のかなたに、あるいは雪のかかった山のかなたに、たなびく雲に反射した真っ赤な色に見えるそれらのシーンはいつもため息をつく感じである。リタイアした日本の芸能人、映画“青い山脈“の主人公であった彼女が晩年をこの地で過ごしていた。彼女は、「この地は最後の楽園だ」と言っている。

アメリカでは、建築設計の仕事はジェントルマンのプロフェッショナル（紳士の専門職）であると言われている。設計事務所を設けている人達の大半は、白人とユダヤ系アメリカ人である。外国人、特にアジア系の人達が、アメリカで設計事務所を維持し続けるのは大変難しい。それは良いクライアントを見つけることが難しいこともある。日本の企業は、バブルがはじけると、アメリカからどんどん引きあげていった。私の仕事は、地元におろしている日系人やアジア系の人達の仕事の主になった。そうした人達が経営する店舗やレストラン、住宅の設計が多くなった。最近、フランチャイズの日本食レストランの設計を依頼された。400～500人も入る様な巨大なレストランである。この設計の仕事のために、ニューヨーク、テキサス、サンフランシスコと、その他の工事現場を視察して廻った。

これらの地は、私がかつて建築修業をし

客の前で料理をするオープンキッチンのレストラン。ハンドグラインダーで模様をつけたステンレスで総仕上げをした。設計1998年、サンディエゴ市



アメリカナイズされた日本レストラン、アリゾナ州、2003年設計。アメリカでは暗いほど高級のレストランを意味する。



た街である。若い建築修業時代の、その時のことを思い出しながら、現場を廻った。つい昨日だったような気がしてならない。そして私は思った。私の建築に対する夢や

憧れは、こんなものではなかったはずだと。その地で昔のSOMの友人に会った時、“クニオは自分の事務所を持ち続けている。羨ましい、素晴らしいことだ”と言われた。しかし、私はあまり嬉しくなかった。私は、まだまだ十分に私自身満足した仕事をしていないと思っているからである。

ロサンゼルスの日米文化会館主催の、「日系人建築家4人展」に選ばれたことがある。自分の作品を展示し、レクチャーを行った。その日米文化会館の改造設計もしている。しかし、私は今の建築家としての自分に、仕事に満足しているわけではなかった。

若い時の、あの超高層への夢、摩天楼への夢は、何処へ行ってしまったのだろうか？本当に夢で、終わってしまったのだろうか？アメリカには、もうパイオニア的な夢はなくなってしまったのだろうか？私は自分に問いかけ、考え続けた。時の流れにそって、仕事をしていくのか？日系人やアジア系の人達のクライアントからの、小さいプロジェクトだけを設計していくのか？プロジェクトの大小に関係なく、より良い設計の為に、精進して行くつもりであるが、しかし、チャレンジ精神に欠け、刺激は少ない。夢をなくした建築家の余生を大切に生存するだけのよう生き方を花に囲まれた最後の楽園でしたくないと思った。

60歳を迎えた頃、人生の最後の勝負ともいうべき、チャンスが訪れた。建築設計での、中国本土への進出である。私の事務所で、1人のインテリア・デザイナーが働いていた。北京から来たジェー・リュウである。彼女は、私に勧めた。“今、中国は建築ブームなので、中国へ進出してみないか？クニオの才能なら中国でいい建築を設計できる。”私は中国に行くことに大きなためらいがあった、それは中国は私にとって未知の国であったこと、中国人とのビジネスをすることは並大抵のことではないこと、私の人生は、特に建築への夢は、アメリカ、西洋文化に向かって勉強をし、仕事をしてきた。しかし、考えた末に、この話にのってみることにした。2003年の8月18日、私はジェーとランドスケープアーキテクトとホテルコンサルタントを同行して、10日程かけて、中国本土のメジャーの都市を視察して廻った。各地で、彼女の友人のセットアップで多くのディベロッパーとミーティングをすることが出来た。現代の中国は、未来へのフロンティアと感じられた。中国全土が建築現場のように、クレーンが立っている風景が見られた。

かつてのテキサスのオイル・ラッシュや、日本やロサンゼルスバブルの時以上の、巨大なスケールの建築ブームである。しかも、たいへんなスピードで工事は進んでいる。2008年のオリンピックや

日系一世や二世の建築家、コントラクターによって建てられた日米文化会館、1980年竣工



中国人のディベロッパーと会食
中国人のもてなしは大変温かみがあるのだが...
それに顔、形も日本人に似ているのだが...

2010年のエキスポだけでなく新しい国造りに奮進しているのである。

しかし、それは建築工事だけの問題ではない。中国全体が、新しい社会、新しい国へと変換しようとして、奮進しているように見た。アメリカが失いつつある、あの西部の開拓史のパイオニア・スピリットが中国にはまだ在る様に思えた。ワイルドな、ワイルドな東部の開拓史のはじまりである。

選びぬかれた世界の一流の建築家や、野心家の建築家達がヨーロッパ、オーストラリア、アメリカ、そして日本から中国へ進出している。現代建築の浅い、現代文化の浅い中国で、中国の政府や民間のディベロッパーから、中国人の建築家も含めて、プロジェクトのとりあいをしている。中国の大都市のみならず、地方の都市にまで現代建築を設計し、都市や街を作っている。今や、中国は建築設計の建築家たちの戦場である。

私は、血が踊り出すのを、抑えることが出来なかった。若くして、アメリカに渡った時に持っていた、あの野望の血は、まだ私の体内に残っていた。私の超高層への夢は、まだ死んでいない。もう一度、私は初心にもどって、チャレンジしてみる決心をした。私は「KIP Architects」という設計事務所を新たに設立した。北京にも支社を設けた。中国において、建築設計を進めていく中で、多くの困難に遭遇するだろう。また、設計以外の様々な問題に突き当たるだろう。中国人と仕事するという事はたいへんな事であるとは聞いている。共産国で仕事をする事はうまくいくのだろうか。しかし、それらの事はよく分からない。それだからやってみようという決断ができたのかもしれない。昔、アメリカに何もわからずやって来た時と同じように。

私の人生は、休むことない戦いの連続であり、そして一生建築の夢を追い続けるのであるろうか。あるいは途中で挫折するかもしれない。どうゆう結果になろうとも、悔いのないようにやってみることにした。最後の楽園を抜け出して、地獄の戦場に突入していく気持ちであった。



北京で一番高いホテル67階からの北西への眺望。
故宮博物院や天安門広場を囲むように古い建物と
工事中の高層のビルが乱雑し、建ち並ぶ。遠くの尾
根づたいには万里の長城が延々と続くのである。私
の中国での仕事はおそらく、いつどこから敵に襲わ
れるかわからない細長い険しい階段の万里の長城
を歩き続ける状態のような気がしてならない

